

28PA-am367

学生同士の協同による学びのコミュニティの創生を目指した教育実践

○飯田 耕太郎¹, 武永 尚子¹ (¹名城大薬)

【目的】名城大学薬学部では5年次の成績不振（学術コース）生の主体的な学習を促進し、基礎知識の低下を抑えるため実務実習に参加しない期間に補習授業を設けている。受け身な姿勢を能動的に改善するために学生同士が交流し、学生同士で学び合う経験を通して、仲間と助け合い、教え合うことで学ぶ楽しさを実感できることを目指して協同学習プログラムを開発した。協同学習法とはアクティブラーニングの教育理論の一つであり学生同士が協同の精神にそって学び合い教え合うことで仲間の学びを最大限にする学習法である。本年度、5年次学術コース生の補習授業において協同学習プログラムを導入し、学生同士の協同による学びのコミュニティの創生を目指した。

【方法】協同学習プログラムは事前学習⇒知識の確認⇒知識の応用⇒知識の補足の4段階で構成した。事前学習は事前にPCや参考書等で学習する。知識の確認は関連する国試25問題を個人で解答する。個人解答後、正答は公表せずグループを組み同じ25問を協同で解く。学生同士のディスカッションにより知識の応用を行い協同して解答を導き出す。ディスカッションは学生同士の協同性を高め事前学習と知識の確認で得た知識の応用を促進する。解答後、不正解問題の解説をレポート用紙に記述・提出することで不足していた知識の補足を行う。

【結果・考察】協同で解答したテストの平均点は個人テストの平均点に比べ有意に高くなった（符号検定 $p < 0.01$ ）。個人で学習した場合に比べ、学生同士が協同で知識を出し合いディスカッションにより解答を導き出した場合の方が、得点が高くなったことが明らかになり協同学習の成果が示されたものと考えられる。